自由意志の非認知主義的解釈の可能性

——スミランスキーの幻想主義とその補完——

佐々木 拓

S・スミランスキーによれば、この世界に自由意志は存在せず、ゆえにわれわれが自由意志をもつことは幻想である。その一方で、その自由意志がなければ、われわれは行為を真に「選択」したり、それに対して責任を負ったりできないという信念もまた彼は抱いている。しかしながら、現実にはわれわれの多くは真に行為を選択し、それに対して責任を負うと信じている。上記の三つの事柄を同時に主張することは可能であろうか。スミランスキーは可能であると考え、それを可能にするのが幻想主義 (Illusionism) だと答える。幻想主義とは、端的に言うならば、存在しない事物を存在するかのよう信じて、自由意志問題にまつわる実践上の諸問題を解消するという試みである。

自由意志問題に関する現代の両立論者は冒頭の三つの事柄を

同時に主張しなくてよいと答えるだろう。両立論者は、自由意志が幻想であることを受け入れつつ、われわれは現に責任を負うが、それには自由意志は必要ないと答える。両立論者は、自由意志論者が伝統的に論じてきた自由意志概念および、それに付随する別行為可能性 (以下 A_P)⁽¹⁾ を行為の責任に対する必要条件としてもはや見なしていない。それでもなお、われわれは行為を選択し、自分のものにできると両立論者は論じる。しかし、われわれは実際に責任概念から A_P を完全に排除しているのだろうか。たとえば「仕方がなかった」という言い訳はしばしば責任を減免する。しかし、この事態はなぜ生じるのだろうか。ある両立論者は、そのような状況で行為者を非難することは効用を減じるからと答えるかもしれない。しかし、なぜそのようなことは効用を減じるのか。その両立論者には「実際にそうだ

から」という以外に答えがない。しかし、われわれはもっと率直に、道徳的に非難に値する行為にはA Pが必要だからとわれわれが信じているからだ、と考えるのではなからうか。両立論者はA Pがない行為に責任を帰すのは不当だという信念を十分に説明できない。

スミランスキーはこの点に両立論者の難点を見いだす。そこで彼が提案するのが原理二元論 (Fundamental Dualism) であり、それを可能にする幻想主義である。彼はこの二つの考えを用いて、A Pを排除する普遍的決定論を受け入れつつも、A Pに根ざした「究極的責任概念」を保持しようと試みる。しかし、自らが存在を否定するA Pに基づいて責任概念を構築するのはある種の矛盾ではないだろうか。本稿の目的は、矛盾や混乱をはらむように見えがちなスミランスキーの議論を解明し、擁護することにある。また、矛盾の源泉と考えられる幻想主義について、メタ倫理学からの説明を与えることで彼の議論を補完する。

一 現代自由意志論争における立場の分類

スミランスキーの立場を正確に理解するためには、現在行われている自由意志論争の中に彼の議論を位置づける必要がある。また以下の議論での混乱を少なくするために、自由意志論争における基本的な立場の名称を確定しておくのが好ましいだろう。

本稿では、スミランスキーも用語法を共有している Kane (2002)⁽²⁾ に従ってこの分類を行う。ケインによれば、自由意志をめぐる理論は次の二つの問いによって適切に分類される。

(1) 決定論問題 (DQ) : 「普遍的決定論 (universal determinism) は真か」

(2) 両立論問題 (CQ) : 「普遍的決定論と自由および責任は両立するか」

DQにYesと答え、かつCQにNoと答えるのがハード・デターミニズム (Hard determinism) である。DQにYesと答え、かつCQにもYesと答える立場が両立論 (Compatibilism)⁽³⁾ もしくはソフト・デターミニズム (Soft determinism) と呼ばれる立場である。これらに対して、CQにNoと答えるがゆえにDQにNoと答える立場が自由意志論 (Libertarianism) と呼ばれる。

二つの問いへの回答は各立場の異同を知るのに有益である。まず、DQへの回答は普遍的決定論へのコミットメントを示すすなわち、この問いに肯定的に答える両立論とハード・デターミニズムは普遍的決定論を受け入れる点で共通している。自由意志論は何らかの形で普遍的決定を免れるような因果性を想定するのが主流となっている。次いで、CQへの回答は自由概念の異同を示す。したがって、CQに否定的に答える自由意志論者とハード・デターミニストは、A Pを条件としてもつ自由概念を共有している。本稿では、A Pを条件として含む自由およ

び、その関連概念を「究極的」と修飾するが、この意味での自由な行為はしばしばAPを備えた意志行為によって実現されるとされる。そのような意志行為を本論では自由意志論的自由意志(LFWと略)、もしくは伝統的な自由意志と呼ぶ。自由意志論者は、APを備えたLFWは普遍的決定論が支配する世界には存在しえないがゆえに、LFWへのコミットメントからDQに對して否定的に答える。逆にハード・デターミニストは普遍的決定論へのコミットメントから、究極的な自由の存在を否定するのである。この両者の態度は責任と自由との関係にも及んでいる。両者はAPを基礎とした究極的な責任概念を共有している。行為に究極的な責任を生み出すのはLFWであると自由意志論者とハード・デターミニストは考えるが、前者がLFWの存在に基づいて究極的責任の存在を主張するのに対して、後者はLFWが存在しないと考えるため、究極的責任(およびそこから生じる全ての真なる責任)の存在を否定する。

両立論者もまた、究極的自由やLFW、そしてそれらに基づく究極的責任が存在しないと考える。しかし、両立論者がハード・デターミニストと異なるのは、そのような自由や責任が道徳的に重要な自由や責任のすべてではない、とする点である。そこで現代の両立論者が採るのは、APを含めない形で自由を定義し直す⁵⁾、自由の条件としてAPを認めた上で自由と責任とを切り離す⁶⁾といった手法である。いずれの手法であれ両立論者は責任の条件からAPという要素を消去することになる。結果、

他の二者に比して、両立論者は自由と責任との関連を重視しない。両立論者が重視するのは適切な理由に基づいて行為できる能力としての理由反応性といった、APを含意しない能力の概念だと言える。

しかし、われわれはAPが現実には存在しないという事実を認識しながら、両立論者の言う(APを含意しない)責任のみを受け入れることができるのだろうか。スミランスキーは否、と答える。むしろ、彼はわれわれの基本的な道徳的直観を捨ててまで、理論の帰結に従うことを問題視する。次章ではこのスミランスキーの議論を確認する。

二 スミランスキーの幻想主義と原理二元論⁽⁷⁾

1 スミランスキーの前提——核心的構想と自由意志論否定

スミランスキーの出発点は二点ある。一つは、彼が「核心的構想」(Core Conception)と呼ぶ道徳的直観である。それは、われわれの責任概念の根底には「コントロール」という要素があるという考えである(Smilansky, 2000, p. 2)。われわれはこの核心的構想を基に、様々な種類のコントロール概念とそれに対応した責任を受け入れている。自由意志論者であれば、APを実現する究極的コントロールを条件とした究極的責任を考えるであろうし、両立論者は、反省によって適切な理由を見だしそれに従って行為するという理由反応性に代表される、AP

を含まない両立論的コントロール (Compatibilist Control: 以下 C C と略) を条件とした両立論的責任を構想するだろう。いずれにせよ、われわれは核心的構想に基づいて様々な責任概念をもち、それに基づいて実践している。これが第一の前提である。

第二の出発点は自由意志論の否定である。スマランスキーは上に述べた L F W の存在を否定する。その理由として G ・ ストロインソンの議論が示されているが、それは、道徳的責任に必要な L F W はそもそも概念的に矛盾をはらんでおり存在しないというものである。この議論は以下の通りである。道徳的な行為は行為者の現にある性格から生じなければ道徳的⁽⁸⁾とみなされない。しかし、われわれの性格は事前の性格と環境から形成されており、自らの性格形成を究極的に自らのコントロール下におくことはできない。自らの性格を自由意志論的に責任ある仕方⁽⁹⁾で形成するには、事前に責任ある自己が存在しなければならぬ。したがって、究極的なコントロールが不可能な以上、責任ある自己の形成は無⁽⁸⁾限背進に陥ってしまう。このように、L F W による究極的な自己形成には無限背進がともなう。ゆえに、自由意志論は矛盾を抱えており、存在し得ない (Smilansky: 2002, p. 491; 2005, p. 250)。

2 原理二元論

以上の前提に基づいて、スマランスキーは原理二元論を展開する。原理二元論とは、本稿の一で提示した C Q に関して、二

つの原理のうち一方だけが正しいとする考え (原理一元論) を否定し、ハード・デターミニズムと両立論という二つの基礎理論 (原理) の両方が正しいとする立場である。これは、C Q に関する回答は責任概念によって変化すべきであり、また二つの理論が支持する責任概念は共に重要である、という考えでもある (Smilansky: 2002, pp. 491-92)。原理一元論はどちらの立場にせよ、「真の責任」を自らの理論の提示するものに限定する点で、日常的に人々に抱かれている責任概念をとらえ損なっている。以下、原理一元論の問題点を見ていく。まずは両立論であるが、両立論の第一の欠点は責任概念の浅薄さである。われわれの多くが考える道徳的責任は一般に A P を条件としたものだが (Smilansky: 2000, pp. 26-27)、この道徳的直観を両立論は無視している。われわれの多くは実際に A P を条件とした責任概念をもち、そうでなくとも、概念的にそのような責任をイメージできる以上、それと対比された両立論的責任は浅薄に見えるであろうし、われわれの直観と十分に合致しない。第二の欠点として両立論は究極的な不正義を含意する。両立論は普遍的決定論を受け入れる以上、われわれの行為は、究極的にはコントロール不能な、性格から単に流れ出るだけの活動として捉えられる。われわれの性格は「与えられた」ものであり、環境と運の産物である。両立論は究極的にはわれわれが変更できないような性格や行為に対して責任を認めることになるが、この不正義を容認しなければならぬ (Smilansky: 2002, p. 493)。

これら二つの難点には、両立論の中にある二つの視点が関係している。一つは、浅薄ではあれ、CCに基づいた両立論的な責任に満足する「両立論的視点」と、もう一つは、われわれの行為や性格に究極的なコントロールが及ばず、ゆえに誰もそれに究極的な責任を負わないという「究極的視点」である (Smilansky: 2002, p. 493)。両立論者の難点は、両立論的視点からさしあたって自他の行為を評価する一方で、APを含む究極的責任概念を消去しきれない点にある。われわれに根付いている究極的責任概念は、常に両立論的視点を脅かし、究極的視点へと向かわせる。そしてひとたび究極的視点に立つなら、決定論を認める両立論はハード・デターミニズムへと転化してしまう (Smilansky: 2005, p. 251)。

ならば、ハード・デターミニズムが妥当かというところではない。というのも、われわれは責任概念を捨て去り、われわれが全般的に無責任であることを受け入れる訳にはいかないからである。APに基づいた究極的な責任が成立しないところでさえ、CCに基づいて行為を評価できる多くの日常の場面をわれわれは知っている。たとえば、アルコール中毒者と健常者のアルコール摂取に対する責任は、APによらずとも、飲まない適切な理由があるときにその理由によってアルコールを控えることが可能だというCCの観点からでも区別が可能である。またスポーツ選手の年俸など、パフォーマンス的な能力を評価する場合にはある状況で能力を發揮するのにAPが必要かを問うと

いうよりは、適切な状況で適切な行為を実行できるCCがあるかが問題となる。これらの文脈では、われわれは普遍的決定論を受け入れた後でも、両立論的な責任の中で生きることが可能。

結局、両立論もハード・デターミニズムもそれだけでは不十分であり、責任に関する実践を十分に説明していない。われわれは原理二元論をとることで、二つの視点だけでなく、二つの責任概念をも手にすることができる。原理一元論に固執してこれらの重要な直観の一方を放棄するのは賢明ではない (Smilansky: 2002, p. 497)。さらに、原理二元論では、CCのみでは説明できないような道徳的实践、たとえば環境的影響が著しい少年犯罪に関する情状酌量を、究極的視点に立つことで正当化できる。不幸な環境で育った少年は自らの理由に従って行為できるが、その理由は生い立ちによって邪悪なものに歪められているかもしれない。性格形成に関する究極的コントロールの不在を認識することで、CCが存在する場合でさえ、行為に対する責任は減じられることが可能である (Smilansky: 2002, p. 497)。これは究極的視点に立つてこそ可能であり、両立論には説明不可能な実践なのである。

3 幻想主義

一元論としての両立論は両立論的視点に引きこもって両立論的責任に責任概念を限定するか、究極的視点にとられて責任の一切を否定するかのいずれかの立場しかとれない。しかし、

両立論を部分的に肯定する以上、二元論を採用しても同様のことが生じるのではなからうか。このことはスミランスキーも自覚しており、「これら二つの視点の衝突は、われわれの個人の生活および十分に尊重された価値、概念、反応、そして実践の深刻な崩壊に間違いなく帰結する」と述べている (Smiliansky: 2000, p.151)。この崩壊はLFWが実在するならば阻止されるはずのものであるが、実際にはLFWは存在しない。ここでスミランスキーはLFWの実在に代わって「幻想」がその役割を果たすと論じる。「LFWが実在する」という幻想は、原理二元論において二つの視点の行き来を可能にする。幻想は、ハード・データミニズムへの転化を妨げることで、両立論的な責任を普遍的無責任から保護し、両立論的視点からの責任実践をも確保する。また、基本的にはAPが存在するとわれわれに信じさせることで、普遍的無能力ではなく、個別の事例における責任の減免が果たされることになる。両立論が究極的視点を自覚すればハード・データミニズムに陥るのに対して、原理二元論は究極的視点の下でさえ幻想主義のために二元論に留まる。

この意味で「自由意志問題においては幻想がしばしば、多大なかつ積極的な役割を果たす」という立場が幻想主義である (Smiliansky: 2002, p.500)。幻想は「偽なる信念でありながら、真と主張されること」を主要な要素としながら、それに加えて幻想を信じる動機づけ、永続性、必然性、自覚の欠如などが要素としてあげられている (Smiliansky: 2000, pp.146-47; 2002,

p.500)。したがって、幻想主義に従えば、われわれは「伝統的自由意志が存在する」という偽なる信念を真だとみなしつつ、かつそれが偽であることに気付かないでいることになる。しかし、われわれはただ理由もなく自らを欺いているのではない。幻想を抱く理由と動機はわれわれのもつ根本的な道徳的直観を維持することにある。そして、原理二元論を維持することはそのような直観を維持することの重要な部分なのである。

原理二元論を維持することは幻想のもつ間接的な役割である。幻想のもつ直接的な役割は、APに基づく究極的な責任およびそれに関連する正義の概念等を直接支持することにある。たとえば、無辜の人間一人を大勢の人のために犠牲にする帰結主義的発想への抵抗感や、APの不在を言い訳にした責任逃れのもつ不当感、努力や献身に見いだす価値、そして悔恨や良心の呵責に対してもつ重要性の認識は、LFWが存在するという幻想によって十全に説明される (Smiliansky: 2002, pp.498-99)。犯罪を犯した人は自らの究極的な責任でそれを行ったのであるから罰せられるのは正当だ、強制なく行為した人が言う「実際にはAPがないのだから責任がない」という言葉は不当だ、と感じられるのは「幻想」から生まれる直観である。幻想主義において、幻想は、APを根拠とする多くの道徳的直観を妥当だとわれわれに信じさせることを通じて、究極的視点において、われわれが自分を究極的に責任ある存在だと信じるようにしむける。この幻想による究極的視点での責任の確保が、普遍的無責任を

退け、CCに基づく両立論的責任を機能させる余地を作り出すのである。

本節の最後に注記しておくべきことが一点ある。それは、幻想主義は規範的理論ではないということである。スマランスキーは注意深く、幻想主義は幻想を無理に作り出したり、偽だとわかっている信念をもって（錯誤的に）生きることを薦めたりするものではないと断っている（Smilansky: 2002, p. 497）。むしろ幻想主義とは説明理論である。われわれの多くはLFWが存在しないにもかかわらず、APを条件とした道徳的直観を抱いている。この矛盾を説明するのが幻想主義であり、幻想主義をとるべき動機付けはむしろ道徳的直観の重要性から引き出される。「人間性は幸運にも自由意志についてはあざむかれており、それが成熟した道徳と個人の価値の条件であるように思われる」と言われるように（Smilansky: 2002, p. 500）、幻想とは原理一元論でもち得ない道徳的直観を整合させるための理論的説明装置なのである。

三 非認知主義的自由意志解釈

1 幻想主義の問題点

スマランスキーの議論は、自由意志問題においてわれわれが抱く基本的な道徳的直観がいかに重要かを再確認させてくれる。自由意志論における究極的責任、両立論的なコントロールに基

づいた能力責任、ハード・デターミニズムの見地からの責任の減免、これら三つの基本的直観のいずれをも何らかの理論的帰結として排除することなしに成立させるといなのがスマランスキーの目的である。そして、これらの直観がわれわれの道徳実践において機能していることから、説明原理としての幻想を帰結する。故に、われわれが現在行っている実践を十分に説明するには幻想主義と原理二元論が必要となる。

しかし、幻想主義に問題があるのも事実である。幻想主義には少なくとも以下の四つの問題がある。一、われわれは現実を生きていない、二、自己欺瞞に陥る、三、真理に対して不誠実である、四、われわれは究極的に不正義を免れない（Smilansky: 2000, pp. 235-68）。幻想主義に基づくなら、われわれはLFWが存在しないという現実から目を背け、自分を欺いて生きているのであり、真実を軽視している。また、究極的視点から見れば責任を問われえない人々への責任帰属という不正義は両立論だけでなく、共に決定論を受け入れている原理二元論にも効いてくる。これらの問題に対して、スマランスキーは四つの問題が困難を呈することを認めつつも、究極的視点と両立論的視点のもつ帰結が曖昧であるために「二つの視点の」正反対の本性が完全には気付かれず、世界の一部の人間しか問題に気付かないと答えている（Smilansky: 2002, p. 502。「」は筆者による補足）。そして、矛盾に気付く人は少数であり、かつ多数者が行う道徳的実践に加われないために人生において大きな困難を抱

えることとなる (Smilansky: 2000, p. 249)。われわれの大半が核心的構想に基づいた道徳的実践にコミットし続ける以上、幻想主義の抱える問題は視点の持つ含意の曖昧さに隠されて気付かれない。結果、われわれが核心的構造を持ち続ける限り、幻想が消えることもない。

スマランスキーの回答にどの程度の説得力があるかはここで問わない。むしろ、本稿では彼が難点の存在を受け入れている点に注目する。われわれはそれに気付かないかもしれないが、事実として欺瞞的で、不誠実で、不正義な生を生きている。このような人生像には大きな違和感と反感をもつ人が多いのではないか。本稿はこの違和感をメタ倫理学の見地から解消することに取り組む。私の見るところ、この違和感は自由意志問題と事実および信念の問題と考えていることに起因している。確かに、自由意志問題は本来、LFWが存在するのかどうかという問いに関わる形而上学の問題である。しかしながら、現代の議論の潮流を眺めるならば、われわれにとって重要なのはLFWの事実的存在／非存在ではなく、責任やその他の道徳的実践との関わりにおいての自由であることがわかる。そのような文脈では超事実的なLFWは仮に存在したとしても、それが超事実的であるがゆえに、責任の帰属等の実践には関与し得ない。となると、自由意志の問題は「自由である／ないことがわれわれの責任帰属にどのような影響を与えるか」という問題として捉え直されるべきである。核心的構想に基づくならば、われ

われは「コントロール」の存在するところでは責任の帰属に動機づけられ、不在の場合には責任の帰属を禁止するよう動機づけられる。このように考えるならば、「自由(意志)」という特性は、責任帰属に関してわれわれの行為を左右する価値的特性だと言える¹⁰⁾。自由を価値の観点から眺める時、LFWの幻想を別の視点から理解する道が開かれる。それは、価値に関する非認知主義という見方である。本稿の残りでは、自由を非認知主義の価値と見なすことで、幻想主義がどのように支援されるか、また自由意志問題の扱い方がどのように変化するかを見て行くことにしよう。

2 道徳的価値に関する非認知主義

メタ倫理学における立場の分類には多くの異論があるものの、現在においては次のような大枠が教科書的理解として定着しつつある。すなわち、道徳的言明が真値をもつかどうか(信念としての命題的地位をもつか)という問いによって認知主義と非認知主義が区別され、さらに前者において道徳的特性は自然的特性であるかどうかを巡って自然主義と非自然主義とに分類される。この区別に基¹¹⁾づいて三つの大枠が作られる。すなわち、認知主義的非自然主義、認知主義的自然主義、そして非認知主義である。このうち、本稿では非認知主義に属するブラックパ

ーンの準実在論を取り上げよう¹²⁾。
ブラックパーンの考えを一言でまとめると、次のように言

える。道徳的特性は世界の側に存在せず、それゆえ道徳判断は

自らの感受性を世界の自然的特性に投影した帰結であり、道徳的言明の真偽は表出される感受性が想定上最も整合的になった感受性のセットに含まれている場合に真と決定される。ここで注目したのは投影説という考えである。投影説とは、善や正といった道徳的価値は世界に実在する特性ではなく、われわれの内面の態度や感受性の投影物だという考えである。マッキーの「特異性に基づく議論」から帰結する錯誤理論を受けて、ブラックバーンもまた、客観的かつ定言的に指令的な道徳的特性の実在を否定する。それでもなお、われわれは道徳的価値について語り、それに基づいて行動している。このギャップの説明理論として導入されるのが投影説である。道徳的価値は実在しないが、それでもそれが実在するかのようになわれわれが振る舞えるのは、自らの感受性や態度を投影している結果なのである。投影説による説明は、身勝手に恣意的な道徳判断を導くと考えられるかもしれない。しかし、ブラックバーンによる道徳判断の真偽判定の方法を見るとこれが誤解であるとわかる。準実在論においては、道徳判断の真偽判定は判定者の内面にある感受性のセットと対照されることでなされるが、この感受性には二階の感受性、すなわちある感受性をもつことに対する是認／否認が含まれる。このような階層的感受性をも含意した上で整合性が担保された感受性のセットは、気ままに変更可能でない点で恣意性を一定程度免れるし、その整合性が保たれる限り、

矛盾した判断を許容しないという点では不合理でもない。

3 非認知主義的自由意志概念の可能性

本節の最後では、ブラックバーンの非認知主義の考えを幻想主義に適用することのメリットを確認したい。幻想主義を非認知主義的に解釈するということは、「LFWが存在する」という言明を感受性の表出と考えることを指す。非認知主義的解釈は、LFWを感受性の投影物とみなすことで、自由意志の問題を事実に関する問題からわれわれの感受性の整合性の問題へと変換する。「LFWは存在するか」という問いは、「責任帰属の基礎にはAPが存在する」という感受性にわれわれ個人がコミットするか」という価値の問いへとスライドするのである。上のように事実と価値を区別することで、本節1で挙げた違和感や反感は軽減される。「LFWが存在しない」というのは事実に関する言明であり、「LFWが存在する」というのは価値および感受性に関する言明である。われわれが二つの言明を同時に主張することに対して抱く違和感や反感は、同じカテゴリーに属する、認知的命題同士のもつ矛盾から生じるのであって、事実としての認知的言明と価値としての非認知的言明との衝突からは生じない。このことが認識されるならば、幻想主義の抱える四つの困難に関しても、スミランスキーとは別の正当化ができるはずである。すなわち、スミランスキーのように、実践的なコミットメントから困難そのものを受け入れるのでは

なく、正面からその脅威を削減できると考えられる。たとえば、非現実的生、自己欺瞞および不正義に関しては「内側から見る」ことによって説明が可能である。われわれが価値に関する判断を行う時、われわれはめいめい自分の感受性を通して真偽を判定する。したがって、「責任にはAPが必要だ」という感受性を通して責任帰属を行っている限り、それはわれわれ自身の価値に基づく行為であって、欺瞞でもなく、まさに自らに与った現実である。また、そのような行為はその感受性故に、究極的な不正義を感じさせない。スミランスキーも幻想が「心の現実性」を創造すると指摘する (Smilansky: 2002, pp. 502-3)。しかし、誤った信念は真なる信念の認識によって容易に修正されるが、感受性はそうではない。感受性は真実を認識しても、多くの場合、ゆっくりとしか変化しないものである。幻想の保持はこのような感受性の変化しにくさによって説明される方が説得的であろう。さらには、真理に対する不誠実さの問題にも回答できる。非認知主義は認知的言明の真偽判定とは別の仕方ではあるが、非認知的な言明の真偽を判定可能である。ゆえに、「LFWが存在する」という感受性もまた、非認知的な体系に基づいて真偽がつけられる。非認知主義的解釈によって、幻想主義は感受性を基礎とした新たな体系によって真理の価値を確保することができる。

以上のように、認知的要素同士の対立から生じる幻想主義のいかかわしはLFWもしくは究極的なAPを価値的特性とし

てみなすことで大幅に減じられるように思われる。加えて、自由意志の非認知主義的解釈に支援された原理二元論と幻想主義は伝統的自由意志概念を責任論のフィールドへと連れ出す働きももっている。従来、責任の帰属の条件として考えられてきたLFWはその超越的特性から帰結する認識不可能性のために、責任実践の領域で現実的に利用されることがなかった。しかし、非認知主義的に解釈されたスミランスキーの理論では「APが存在しない」という事実言明を責任の減免の論拠として利用できる。また、「LFWが存在する」という価値的言明には責任帰属を動機づける役割を付与することができる。これによって、われわれは自由意志論という理論の抱える欠点にとらわれることなく、LFW概念に価値的役割を付与することが可能になるのである。

結 び

本稿では、スミランスキーの原理二元論と幻想主義がわれわれの基礎的な道徳的直観の保持のために要請される理論であること、そしてそれがLFWの非認知主義的解釈によってより説得力が強化されることを確認した。従来の自由意志論争の焦点は形而上学的事実に当てられていたため、議論を狭い領域に限定していたように思われる。しかし、本稿で扱った非認知主義に限らず、価値に関するメタ倫理的洞察を導入することで、

自由意志問題へのアプローチは今後大きく発展するだろう。われわれの道徳的直観と実践を十全に説明できる理論を生み出すには、このような展開が必要になるものと思われる。

注

- (1) 正確に述べるなら、APには別行為可能性と別意志可能性が含まれている。しかし、別意志可能性は別行為可能性を実現するために想定される装置であるため、スミランスキーが別行為可能性を放棄する以上、別意志可能性を独立に考える必要はない。したがって、本稿ではAPを別行為可能性に限定して議論を進める。別行為可能性と別意志可能性の区別については成田和信「責任と自由」(勁草書房、二〇〇四年、五五頁)を参照。
- (2) Kane, Robert: 2002, "Introduction: The Contours of Contemporary Free Will Debates", in *The Oxford Handbook of Free Will* (R. Kane ed.), Oxford University Press, pp. 3-41. スミランスキー自身も自身の論文で三つの問いによる責任の分類を行っているが、本稿では簡便さと一般性を優先してケインのものを利用した。
- (3) 本稿では、普遍的決定論の意味としては「世界に生じるあらゆる事象は、当該事象を必然的に生じさせる原因(群)をもつ」という緩い規定にとどめる。
- (4) チザムやT・オコナーの行為者因果説がその典型である。ケイン自身は自由意志論を自認しているが、本稿注3で示したような広い意味での普遍的決定論を受け入れている点で例外的である。
- (5) たとえば、フランクファートの二階の欲求理論、S・ウルフの理由の理論 (reason theory) などが挙げられる。
- (6) いわゆるフランクファート型事例やフィッシュャーの準両立論、P・ストロロンソンの反応的心情論が代表的である。
- (7) 本稿では以下の三点の文献を中心にスミランスキーの主張を概説する。Smilansky, Saul: 2000, *Free Will and Illusion*, Oxford University Press. Smilansky, Saul: 2002, "Free Will, Fundamental Dualism, and The Centrality of Illusion", in *The Oxford Handbook Of Free Will*, (Robert Kane ed.), Oxford University Press, pp. 487-505. Smilansky, Saul: 2005, "Free Will and Respect for Persons", *Midwest Studies in Philosophy*, XXIX, pp. 248-261. スミランスキーの議論を適切に理解するには二〇〇〇年の主著を参照するのが最善ではあるが、本稿では紙幅の関係上、主張がコンパクトにまとめられた二〇〇二年の論文の筋を追って議論を進める。スミランスキーへの言及箇所にも、本論中でページ数を記す。
- (8) Strawson, Garen: 1994, "Possibility of Moral Responsibility", *Philosophical Studies*, 75, pp. 5-24.
- (9) 自由意志論者は性格からではなく、LFWから生み出された行為こそが道徳的な行為だと反論するかもしれない。しかし、この考えはStrawson, G.: 1994 (pp. 20-21)で論駁されている。
- (10) 本稿では価値という言葉を「なんでもあれ人々を特定の行動

へと動機づけられるもの」というもっとも広い意味で理解する。

- (11) Miller, Alexander: 2003, *AN INTRODUCTION TO CONTEMPORARY METAETHICS*, Polity Press, Blackwell Publishing Ltd.
- (12) Blackburn, Simon: 1984, *Spreading the World*, Oxford University Press.
- (13) フラックスマーンの議論については、Miller: 2003 (pp. 52-94) も参考にした。

(ちよさき たく・京都大学)